

# ジャン・パウル『おめでた老師』(1797)補遺(後篇Ⅰ)

飯 塚 公 夫 訳

## 第三牧会書簡ないし回状(注1)

エゴイズムについて

いとかきがえなき友よ！

奇妙この上ない場所換えを、主に三種類の間人でもってやってみる。  
プロブディンナグ 巨人国人と小人国人とガリバーたる私をもってしてである。私は彼らに、  
リリパット 代数の値のようにあらゆる時代と空間を用いて置き換えを行って、それからそれらがなおまだ私の知っているものかどうかを吟味する。そこで例えば、フリードリヒの国王精神を検証すべく、それをさまざまなものにした一法王に  
エフォルス しーサルタンにしースパルタの監察官(古代ローマの監察官に相当するスパルタの国家官僚。ハンザ版の注より)にしーそれから  
エフォルス 神学校監督官にした一私はそれを引き続きカトリック神学校の校長に召喚し、それからラゲーサの修道院長(シチリア島ラゲーサの修道院長は、毎月選出されてその月は無制限の権力を与えられた。ハンザ版の注より)にそうしー紀元一世紀の教父へと一十六世紀の学士へと一文学新聞の寄稿者へと昇進させたが、一度々それがこうやって得た知見をそれから、若干の例外はあるものの、再び剥奪して、それらを ポンティフィカリブス 僧形 よりも ナートウラーリブス 自然の姿で、絶壁海岸に放置し、アラビアのテントにそうし、高原牧舎にそうして、それにアルプスホルンを与えた……このヴィシヌ神(ヒンズ 二教の)の十の変身を常に追跡し殻を剥がし続けるために、私がどんなに目を凝らしておく必要があったか、これは筆舌に尽くしがたい。あの忌まわしいスペインのフェリペ二世の鱗を落とし皮を剥ぐ方が容易だった。それは彼が私の前で私のファンタジーの舞台衣装を全て試着しなければならなかったときのことであり、この時代の石胎児、この精神の動物岩

が、私の前で宗務局評定官にヴァレ・ド・ファンタジーの召使に一税関役人に一サドカイ  
 人に一徴兵将校に一キリスト教徒第一号に一アルカディア協会（スウェーデンのクリ  
 スチナ女王の庇護  
 下に 1690 年ローマに創設された反バロックの作家協会「アルカディアアカデミー協会」の会員。ハンザ一版の注より））に一ベルリン市民に一ホーフ市民になっていた  
 たときのことだ。――

自らの身をもってこの民族移動兼魂のいどう遍歴を試みるならば、さらにもっと学  
 ぶところが多くなる。私はフランクフルトで自分を選出したり一自分がそこで  
 どのように振舞うかを見るためだ一ローマ皇帝に（原注 1）一使徒に一老騎士に一  
 バスチーユの司令官に一九人の癲病患者の一人に（『ルカによる福音書』17、11－19）一西インドの黒  
 人に一フランシスコ会修道士に一ユダヤ教大司祭に一枢機卿に一パリの洒落男  
 になったりした。私は永遠のユダヤ人ないしサン・ジェルマン（18 世紀の伝説的神秘主義者  
 で、永遠の若さを保っていた  
 と言われる有名なサン・  
 ジェルマン伯爵のこと）のようキリストに、西暦紀元の時代ないしその後のアンチクリストの時  
 代や十二世紀に、361 歳まで生きた時をかけるヨハネス（カール大帝の行李長）  
 とともに生きたのみならず、すでにその前のネブカドネザルやアーピス（古代エジブ  
 トで神と崇  
 められて  
 いた聖王）の時代にも生きていたのだ。その結果はどうだったかと言うと一謙虚と  
 公正が大事だと知った。私はこのことを高等比較解剖学と呼ぶが、これによっ  
 て、ドバントン（フランスの博物学者ルイス・ジャン・マリ・ドバントン（1716－99）のことで、彼はビュフォ  
 ンとの共著『動物の自然誌』の中で、馬の蹄と人の手の類似性を指摘した。ハンザ一版の注より）のような  
 ものと同様に、恥ずかしくなるようなたくさんの類似が発掘されてきたのであ  
 る。自分と他人を推し量るのだが、かえってそうすると生き物の梯子の同じ段  
 の水平の間隔を、それより多い段の垂直の間隔と見なさないし、そうすれば結  
 構公平な考えをするものなのだ一少なくとも死んでいる人たちや友人たちや見  
 知らぬ人たちに対しては。

このことが教えてくれるのは、地上には類似の方が差異よりも大きくかつ頻  
 繁であるということだ。実がいっぱい生った樹木の精は、もしそういうものが  
 存在し口をきけたなら、花がいっぱい咲いた同一の樹木の精を軽蔑し、このも  
 のはまた葉っぱがいっぱいついた樹木の精を見誤ることだろう一蝶と蛹と青虫  
 は、もし彼らに判断力があつたなら、お互いの間に血縁関係を認めることはし  
 ないだろう。丁度合同する前の三身分、はたまたロンドンのプライス同様にで  
 あるが、この人は、三つの別々の仮面キャラクターを用いて、手形浄書兼模写

行為を見事に隠蔽したのである（注2）。

自然はある一つの世紀において、悪い素質の人間と良い素質の人間を、他の世紀とほぼ同数に分配しているので、人類の劣化も向上も、一瞬が描き出すほどの規模のものではないのである。悪徳が高熱のときのアントニウスの叱責（古代ローマの政治家マルクス・アントニウス（BC82－30）は高熱のときのみスティックな平常心を忘れたという。ハンザー版の注より）とか狂犬の一噛みとか妊婦の食欲とかにすぎないような時代もあれば、美德が牢獄でのマイホーム感覚や商船上での節約や節操にすぎないような時代もある。

スパルタ人や最初のローマ人たちは、自分たちは偉大なのだとは知りえなかった。かくして我々の世紀及び我々全てが大したものなのだということもありうるわけである。しかしこのことを我々は感じるができないのであり、それができるのはただ、将来我々に見とれて我々の後に続いて登ろうとしてできないでいるものたちのみなのだ。かくしてある偉大な行いは、実行者には、そのずっと前とそのずっと後には崇高に見えるものの、役になりきっているその瞬間にはそうではないということがありうるのであり、心の太陽が真昼の灼熱状態にあるときには、目標は彼の前では、達せられた目標の高さよりももっと高い所で輝いており、現実があって理想は高められるのである。

あまり目立たない助けや不随的事柄があつたりしたことを我々が知らないせいで、昔の偉大な人間や行為は、それがそうであったよりももっと気高くもっと大胆なものに、我々は思い描くのであり、同じように我々は、古い山城は、陰しい切り立った雨ざらしの岩壁の先端に築かれたと考えるのだが、年数と天候が作用してはじめて山が露出し先鋭化したのである。

このことをエゴイズムというものに適用してくれたまえ、いとかげがえなき友よ！

あらゆる手紙や都市において見つかるのは、我欲が根を張っていくことに對する嘆きである。この醜い乳癌むねのがん兼心臓癌こころのがん、言い換えるとこの本当の意味でのこころ魂の衰弱症に対するそれである。一つの町全体がエゴイズムを嘆いていることがよくある—その町全体のそれをである。すでにその嘆きはいい徴しるしなのである。黄金海岸では、陽に焼けたたくさんの褐色の顔のことで苦情を訴えはし

ないだろう。完璧なエゴイストなら、自分以外の完璧なエゴイストに気を悪くすることはないだろう。じっとそこに座って自分の利益だけをあれこれ考えている猿にそうしないのと同じようにである。一愛へのあこがれはそれ自身愛なのだ。野蛮な民族及び賤しい民族の中では、友情というものは、先に行くための手段ないし**追い風**にすぎないのであり、それが目標ないし胸に吸い込まれた**命の風**なのではない。しかし、いずこにおいても、肉体という鋼でもってただ魂の火花のみを叩き出そうとする文化というものは、他者の心のための心を獲得することを目指し、我々に友情というものを、友情の印<sup>しるし</sup>や利益よりももっと高く評価することを教示する。我々は学問や道徳や友情において、最初はそれらの利子のみを愛するわけだが、次いでそれらそのものを、我々の利子を犠牲にして愛するようになる。野蛮な時代と野蛮な人間の友情は、利を生む行為しか求めない。もっと高度な友情は、千の音節からなるその反響<sup>エコー</sup>以外何ものも切望しない。中世においては一人の非封土領主<sup>オーデルマン</sup>（原注2）はその友人兼戦友の頭を穴が開くほど殴ることができた。彼らの鉄の愛の絆がそれに耐えたのであり、翌朝二人で御者と商人の頭をぼこぼこにすれば済んだ。我々の時代においては、辛うじて不倶戴天の敵同士が心ゆくまで殴り合いできるにすぎない。

内なる人間が傷つきやすく優しくなるにつれ、同時に我々の要求と我々の苦痛も増すのである。しかしまさにこのより大きな温かみこそ、外気温についての我々の判断を誤ませるのであり、我々は熱い風呂桶から避暑用の部屋の中へ飛び込んで行き、アレキサンダー（<sup>註</sup>）の家庭教師（もちろんアリス<sup>トテレスのこと</sup>）のように、日光に当たりながら寒気を覚える、そんな湯治客に似ているのだ（原注3）。だからして、感情のない人間に地上で出会う頻度は、何人も感情豊かな若者には敵わない。ためしに地上にヴェルテルのような人間だけを置いてみたまえ。すると全員がお互いを氷柱だ雪だるまだと公言することだろう。

わが友よ、ここで私に、他のものは水イモリだときき下ろしている善良な火イモリたちに対して（イモリが赤いことをとらえて「火イモリ」、水辺に生息することで、「水イモリ」といつているだけで、種類があるわけではないだろう）、折りを見てこう一言することを許してもらいたい。「とにかく温血でありなさい。でも君たちをこそ愛さないものの、普通は地域世界を愛している人、言い換えるとその愛が

君たちの愛とは別の方言をしゃべっている人、そういう人のことを、どの人も冷血の両生類だとは見ないでもらいたい。かくして冷血の昆虫、蜜蜂ですら、いのちのぬくもり 体温を持っており、そのことは、私には、第一に、冬のそのむっとする蜂房から、第二に、崩れている小さな雪だるまがあつてそれを雪の中で迷子になっている一匹の蜜蜂が溶かしてしまうことから、わかる。否、内なる人間は、温室の中の日陰になった植物と同じように、鉄の支柱をぐるっとよけて温かな太陽に向かって、つまり温かな心に向つて身を撓わせて伸びて行くのだ。愛してくれる配偶者や愛してくれる親や助けてくれる人々が、君たちの周りにまだ見えている限りは、愛を要求するのはいい。しかし愛を退けたり拒んだりはいないでくれたまえ。君たちは、こみいりすぎた状況や必要の下で、丁度磁針が鋼製品及び鉄製品の横では一時的に大きな磁極の方へその方向を定めるように、無力化してずたずたになった心しか携えていないかのような男たちは冷たいと決めつけるが、それはこの男たちの方で君たちのことを熱が過剰だと曲解するのと同じくらい大いに正しいことなのだ―つまり正しくないことなのだ」と。

しかし要点はこうだ。人間は誰も一特に若い人は一次のことを軽く盲信してしまうということ、これである。つまり、海陸両路の自分の運命と歴史は―自分の能力は―自分の不運は―自分の幸運の星は―自分の愛は―自分の内と表のすべては、豊穡で尽きることなき神の摂理による類稀な神童兼きせきのこ自然劇しぜんのたわわれであり―自分は海陸の奇蹟兼彗星であり、（それゆえ彼は彗星メダルをいくつかわが身に鑄造している）（注3）―自分の地上での役にはただすなりと、せいぜいパリのオペラ座で代役が一人配されるように、自分が配役されているのであつて（それはない！千人が各役に配役されているのだ）、だからしてライブニッツがわたしおのれの自我を、モナド算術の意味で単子と呼んでいるのはまことに正しいのであり、単にそのことよつてのみ、**利害の一致**が、地上の錯綜した劇にもたらされるのだ・・・と。それで誰もが思うのだ。自分だけが十分愛しているのであり、自分は地軸で長期間広範囲に引き寄せている磁石なのだ、と。

全くのところ、私はこれに何の反対もない。そのような美しい道徳的な誤謬には敬意を払うし好きでもある。しかし、私が残念に思うのは、苦しみを経験

し時間を経ないことには、誰もそれらを論駁できないということだ。

私は、一番の友よ、

汝の

J.P. なり

### 若干の比喩の追伸

しかしながら、上級の人間階級には心のエゴイスティックな仮死状態が若干残っているということ、そしてそこでは情熱の雷雨は太陽熱によってではなく、猛烈な寒さによって熟すということ、これを私は否定するつもりはない。しかしそれはそうでなければならないのだ。彼らの夫婦生活は（そしてさらにそれ以上に彼らの冷たい影の中で結晶化してくる子供という硝石は）さして温かみがなくともなかなかうまく作られうるのである。なにしろ夫婦生活も子供も、他ならぬ細やかであること、これだけが肝要だからである。丁度きめ細かなパンは、きめの粗いパンよりはるかに弱い熱のパン焼き竈を必要とするのと同じようにだ。しかるに彼らは、ゼリーのように、同時に甘さと寒<sup>つめた</sup>さを合体させる。第二に、彼らの身分が、オオヤマネコの目を、したがって寒い気候を要求するのである。丁度人は、寒さの中にあるときに、一番たくさん明りを引き寄せるように。第三に、昔から、上等な男性は、胆汁と寒<sup>つめた</sup>さによって自己を高めてきたのであり、愛や情熱によってそうしてきたのは下等な男だけだった。丁度上等の生地を膨らませなければならないときは、酵母兼パン種をより多く必要とするようにである。ブンパーニッケル（ライ麦製の黒パン）にはほとんど必要ではない。—さらば！

## 第四牧会書簡ないし回状

ここでは約束された三つの脱線が行われる

わが親愛なる友よ！

これからついに期待していただける三つの論考が続く。さりながら、私の最新作の一つにおいておおびらにそれを使用することは断じてないという保証はしない。本というものは、友人へのより厚い手紙にすぎず、手紙とは、世の中へのより薄い本にすぎないのだ。

私はハイネ（クリスティアン・ゴットロープ・ハイネ（1729-1812）。当時の著名な古典文献学者）とハイデンライヒ（カール・ハインリヒ・ハイデンライヒ（1764 - 1801）。ゲーテ・シラー及びカント派に嫌われていた当時の詩人兼学者）のように、論考のことを余論と呼ぶ。

**教会での眠り**に関する第一余論はこうだ。多くの人々はそれを長い贖罪兼断食日にのみ限定しようとするが、それは医者によれば、眠りは空腹と渇きと座位を取り除いてくれるからだ。しかし私は逆の考えだ。空きつ腹のときが最も健康かつ安らかに眠れるからこそ、食事が贖罪日には禁じられているのだ。

それどころか教会の眠りは、説教者が、良心の眠りから醒ましてやりたい人間をそこへ連れて行きたい第一のものだ。つまり説教者は一カエルがそれと同じ日数の後に、肉体的に脱皮するように一八日後に宗教的に一皮剥けるために入ってくる聴衆を望むのであれば一彼らから古いアダムを、子供にそうするように脱がせてやれるのは（注4）、まどろみのとき以上にいいときはないのであり、それはダライ・ラマの爪を切っていいのは、彼がいびきをかいて寝ているときだけであるのと同じようなものだ。説教者が告解者たちを観察したければ、眠っているものが観相学の観察に耐えそれに資すること一番だと、ラファーターは言っている。彼がアレクサンダー（Ⅴ）のように、この人間は人間なのだ（すなわち脆いものだ）ということを裏付けたければ、アレクサンダーが行った三つの証明手段（注5）のうち一つだけ残されているのであって、それが眠りであり、彼は起きている仲間のものに、眠りに就いている仲間のを説教壇から指し示すことができる。彼が改悛の情なき悪人に地獄を本当に熱いとこ

ろとして、悪魔を禍々しいものとして描いて見せようとするならば、この雷鳴は夢の残響の中では何倍にも増強されることだろう。そして罪人は打たれて朝の汗だく状態で目を覚ます。さればイージボルト(詳細は不 明)もこう語っている(原注4)。あるベネディクト僧の場合、起きてから飲もうと思っていた瀉下剤を夢の中で摂取してしまったら、みごとに効き目があって、朝になって、処方されていた薬を飲む必要が全くなかった、と。一第二のものは(本段落最初の文章「良心の眠りから醒ましてやりたい人間をそこへ連れて行きたい第一のもの」に続く第二のもの)、結婚の祝辞を祭壇上で行うときだ。このときは、誰も眠るわけにはいかず、立っている。

これが、気づかぬうちに私を**結婚の祝辞**という第二の余論へ導いてくれる。

上流階級のもののの中には、結婚生活に入るに当たって、後に正式に、それを破るのではなくとも、それを解消する意図は持っていないものが若干いる—しかしながら大部分のものは、結婚契約書においては、本当にまた別れたいときのことをなおざりにして、その中で(新兵が勤続年限延長契約においてそうであるように、彼らは明らかにそうした方がいいのだが)、そのときのことを一言も明記しない。それゆえ別れの数と全く同数の、炎による**渴いた離別**が、インクによる**湿った離別**に先行するのであり、それゆえ拷問が長年にわたるのであり、それゆえ心の傷が開くのであり、それゆえ死刑執行人とかその婆さんといったことば(喧嘩のときの罵りことばだろう)が出て来るのである。藁冠のスピーチ(注6)をするものでなくとも、結婚のスピーチをするものが、若いカップルに、死と宗務局が脅しをかけている離別の、その下準備のことばを一言も言わないのは一体何故なのだろう。一彼は彼らに、この結婚天気境界を忍耐強く我慢するように警告することができないものか。一彼は結婚の目的は何なのか、すなわちその棚卸しをすることなのだということを言うことができないものか。丁度ケーキ職人がその徒弟にケーキ作りを許可するのは、ひとえに彼の作るケーキは全て駄目だと言うためであるように。彼はエピクテトスのように、新郎新婦に対して、決してお互いに心を寄せ合うことなく、別れのことを考えるように願うことができないのだろうか。結婚式のスピーチをするものは、それほどルター派の結婚の目的を知らないのだろうか。つまり、離婚こそがわれらが流派を識別する



教義のうちに入っているということを忘れることができるほどにである。それは、カトリックへの改宗が行われている我々の時代において、熱心なルター派のものなら誰もが、その行状を通して浮き彫り文字で、言うなれば打ち抜き鑿でそうするように彫り込む基礎的教義なのだ。一もっともカトリックの小さな国はプロテスタントの国々の真っ只中にあることがよくあって、真実の声は聞こえぬままそこを飛び越えて行ってしまい、それは楕円焦点反響ドームでは、二つの <sup>しょうてん</sup> 極 にではなく、中央にいるものこそが、一言も聞き取れないのと同じである（楕円の一方の焦点にいる人のことばが、他の人には聞こえないのに、もう一）。しかし、誤りの方が真実よりも声高で、疫病のほうが健康より感染力があるとしたら、何たる不名誉なことか！一もし私が結婚式のスピーチをする人に、新郎新婦にはお互いの愛情の危険事項を暴露してやるのみならず、それに対抗する最良の手段を掴ませてやることも期待するとしたら、求めすぎだろうか。つまり並みの手段は無力なのだ。良き教育家は、若い男女は度々お互いに会ったり話をしたりさせて、お互いの全能の力を減殺させたらいいと勧める。そして交わりによるこの減殺に向って良き結婚生活は努力がなされるのである。しかしかになしてこれが、お偉方たちの広大な豪邸で成し遂げられうるだろうか。つまりそれは、野戦病院（用途が似ているので）と同じように築かれねばならないのであり、これはプリングル（イギリスの軍用薬物学の権威ジョン・プリングル（1707－82）。その『軍中疾病（観察記）』（1752年刊。独訳は1772年）は良く知られていた。ハンザー版注より）によれば、患者がそこをいっぱいにする丁度さらにもう一倍の空間が、健康のためにはあった方がいいというのである。一結婚のスピーチをするものは、もし弱い頭の持ち主であったならばだが、結婚生活に入る前のロマンチックな愛に反対する神学上の理由を取り集めて、結婚生活中の愛に對置させることで何とか切り抜けることが一体できないものなのか。つまりそうすると彼は花婿に教えてあげられることだろう。愛は男性にはふさわしくないということを、愛は彼を一人の女人がそうするのと同じくらい柔にするのだということを、愛は相手の欠点に対しても、離縁状にある全ての長所に対しても、彼の目を眩ませるのだということを・・・・・・これが私流の結婚の祝辞たる説法のささやかな草稿であり、私はこれをいわばハンプルクの牧師たちのように、土曜に町に回覧する。――

私の第三余論は、**高貴な辺りの無信仰**というものに触れることになる。

奇妙に思うに違いないが、私はそれを完全に否定するのだ、最良の友よ！ーただ二つの異なった時代を混同してはならない。前の時代と今の時代のことだ。

ロチェスター（ジョン・ウィルモット・ロチェスター伯爵（1647－80）。チャールズ二世の宮廷の機知溢れる風刺家。死の直前に無信仰から改宗した。ハンザー版の注より）とその王の支配下においてはーそして後にはラ・メトリ（『人間機械論』で著名なジュリアン・オフレ・ド・ラ・メトリ（1709－51）のこと。1748年フリードリヒ二世によってベルリンへ招聘された）とその王の支配下においては、純然たる本物の無信仰が支配していたと思ってもらいたい。しかし先を聞いてほしい。適当なところのある我々ドイツ人には、あまりにも真面目すぎるジョンソン（サミュエル・ジョ）の傑出した「ランブラー」誌（サミュエル・ジョンソン主宰の週刊誌（回発行の文学雑誌（1750－1802））の中で、私は読んだことがあるのだが、宗教心のある善人だった騎士マサイアス・ヘイルは、自分が無信仰の信奉者だと公言していたが、それは彼が言うには、自分の弱点から生じる影を宗教そのものに投げかけないためだったらしい。これが私にとっては当時の社交人というものを推測する鍵なのだ。ロチェスターやラ・メトリやおびただしい社交人や宮廷人たちは、結構よくわかっていたのだ。彼らがアダムやペトロや可愛い天使たちと全然似ていなかったわけではなかったのが、他ならぬ**落ちる**ときだったということが。しかし彼らは心にとてつもなくたくさんの道德心と宗教心を持っていたのであり、そのことが私にわかるのは、彼らが、そういった心を行為によって汚さないように、前述の騎士ヘイルのように、逆の信仰告白を公言していたのが見せかけでなくはなかったからだ。そのことによって彼はさらにその上、自分たちの実践の鉄ないし錆のしみを、後に無信仰理論の仮面に付けることができるという利点を手に入れたのであり、彼らは、いかにして聖職者が、信仰告白に対して、信仰告白者に重くのしかかるような罪を背負わせるかを読むという純粋な楽しみを体験したのだ。宮廷においては、宮廷が支持するように見える助言でもってしか阻止できない事柄に肩入れしなければならないケースはよくあることだ。

我々の時代はこういうことはなくなっている。教育についての口先だけの非キリスト教徒とか口先だけのキリスト教徒がいたら、私に教えてくれたまえ。

大聖堂主任司祭が、朝の説教師が、シオンの守護者<sup>（狂信的なユダヤ教徒のこと）</sup>が、幾日も、心配することなしに、社交人と馬や車で一緒にしたり話をしたりすることはできるが、宗教については一言も社交人から漏れてくることはないだろう。それどころか彼は、神とか不死性とか貞潔とか恥じらいといったことば（原注 5）を口に出すことは、ただもう最高にいやがることだろう。イギリスにおいては、今や簡単に就任宣誓<sup>テスト</sup>（官吏は国教徒に限るという「宣誓条例」（1673）（1829）に従って官吏就任の際行われた宣誓）が行われ、誰でもその聖餐式を受けその職を引き受けており、あっちでもこっちでも膝を屈している一新たに戴冠した皇帝の昼食の席で帝国伝来の祈りを行わなければならないがゆえに、聖職選帝侯になることをためらうような宮廷人—あるいはまた、ポーランド国王になることを、このものは「正統」という付加語を保持しなければならないがゆえに拒むようなそれは存在しない—私がむしろ日々見ているのは、最上流の人々が「正統なる」とかはたまた「いと信仰深き」（昔のフランス国王たちの尊称）とまでヨーロッパ中で呼ばれるという名誉を追い求めそれに手を伸ばしているさまである。—

しかしもういいだろう、わが最良の友よ！三度以上脱線する必要はない。私の仕事が、君に将来これまでと同じくらい熱心に手紙を書くことをやめさせる。いまだに私の四つの<sup>（正しくは）</sup>回状に対しては一行だに返事を得ていない。君は病気なのか。元気に暮らしているのかい！

汝の

ジャン・パウルより。

追伸。この牧会書簡を受け取ったか否かをほんの三行で連絡してくれたまえ。私はそれに従う。

## 原注

原注 1 黄金文書によれば、私は結構ちゃんとした形で、選帝侯席のお歴々によってさえも、選出してもらえるのである。つまり私及び全く同じような侯爵も方伯等々も、ドイツ皇帝座から排除されるのは、ひとえにつぎのよ

うな憂慮があるからにすぎないのである。つまり我々は、とりわけ結婚すれば、万一我々が特別な割り増し年金をもらわないとなれば、玉座だけでは自分を維持できないだろうというそれである。しかしながらこの心配事例は、私の場合は他の帝位志願者たちよりはるかに生じることはないだろう。もし私に私の皇帝特権の中で、次のような小さな特権（一つの大きな特権はその代わり抹消するがいい）を許してくれさえすればである。つまり全国民が、私が書くものを購入しなければならないというそれ（例えばわが帝都ウィーンは『ヘスペルス』をそうしなければならないというそれ）をである一私の本たちが、そうすると私自身のための被扶養特許状（皇帝が生活苦の俗人に発行して、教団施設で扶養してもらえようにした特許状）となるだろうし、私が私自身の被扶養特許状受領者兼出願者となるだろう。しかしこれはおそらくユートピア的梦想であり続けることだろう。

原注 2 <sup>オート</sup>荒地ないし<sup>エーデ</sup>荒蕪地から来ている。それは領地ないし非封土地（封建時代、地代や年貢等の封建的義務を負わない自由領地＝完全私有地のこと）のこと。そこから非封土領主ないし非封土領有者ないし<sup>エーデルマン</sup>世襲領主<sup>エーデルリッゲ</sup>ということばができた。（おそらくオーデルマンというのはジャン・パウルの造語で、その成り立ちを説明しているのだろう）

原注 3 ディオゲネス・ラエルティオス。第 9 巻第 11 章 9。（邦訳『ギリシア哲学者列伝』（下）169 ページ（加来彰俊・訳、岩波文庫）。ただし 9 ではなく 80）で人物を取り違えているようだ）

原注 4 『文選』26 番。

原注 5 ゆえにキケロは言う、恥じらいは恥じらいのあるものによって言挙げされることはない、と。一貞潔は貞潔な女性によってそうされることはない、と言っているのは、感受性のあるとある女流作家である。

## 注

注 1 「第二」までは「兼(und)」となっているが、ここでは「ないし(oder)」となっている。意味があるわけではなく、表現の細部への無頓着さないしおほかさの表れの一つだろう。

注 2 イギリスの化学者・錬金術師ジェイムズ・プライス (1752 - 83) は水

銀から銀や金を作れると主張したが、実験が失敗すると自殺した。彼は業績がないのもかわらず学界で出世していったらしく、そのことを言っているのか。それとも他の詐欺師と混同しているのか。

注 3 この括弧は原文にはないが、次に使われている括弧と同じように間接話を離れて直接話法となっているので、作者自身の声と解釈して、ここにも括弧を加えた。なお「彗星メダル」については詳細は不明。

注 4 『コロサイの信徒への手紙』3、9 - 10 より。「古いアダムを脱ぎ捨てる」という熟語は「更生する」の意味で使われる。

注 5 「私は、私の眠りと欲情と排泄行為でわかるように、一人の人間にすぎない」と言ったという伝説による。

注 6 もとは藁の冠を婚前交渉のある花嫁に被せて笑いものにしたものらしいが、後には結婚式の翌日にスピーチとともにそれを花嫁に被せるという儀式になった。

使用テキスト Jean Paul: Sämtliche Werke, Hanser-Taschenbuch-Ausgabe, Bd.7, München 1975。今回は 467 頁 28 行目から 472 頁までと、498 頁 1 行目から 502 頁 6 行目までを訳出。文中の改行・ダッシュは原文通り。コンマ・ピリオドは訳文に合わせて変えている。原文が斜字体のところは、太字にしてあるが、たしかに強調の場合もあるが、法則性は見出し難い。原注は、原著では各頁の下に置かれていて、本文の一部と考えた方がいいのだが、これも煩雑にならないように最後にまとめておいた。

## 追記

当初は最後の「第五牧会書簡兼(ないし)回状」に代わる「付録の付録—あるいは、わがクリスマスの夜」という部分も含めて出す予定でしたが、枚数が 3700 字ほどオーバーになりましたので、これは次回に回すことにしました。従って表題が「後篇 I」となっています。